

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。



今回はいつもの「森づくり」とちょっと方向性を変えて、ガチの林業で働く女性を取材してみました。女性を含む多様な人たちが林業という職場で働くことって、森づくりに何か影響を与えるのだろうか、という視点です。今、社会が変わって女性が持てる選択肢も以前に比べたらだいぶ増えたのではないかと思います。林業に興味を持つ女性の話も耳にするようになりました。必然的に林業業界も変化を迫られるでしょうし、ひいては森づくりに影響があるのではないかと思います。

実際に話を聞いてみると、驚くほど普通に女性たちは現場で働いているし、男女差を感じていないでした。これはむしろ、普通の会社組織の方が男女差があったりするということもあるのではなからうか。もしかしたら社会が中心となって現場が変わっていくのではなく、こうした現場の側から社会が変わっていくということもあるのかな、と思った取材でした。

モリイク vol.29 2025年4月発行

発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証林およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

M O R I - I K U

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.29
Apr. 2025

多様性を変える 林業

多様な人材が働く林業が
森づくりをもっと変える



モリ♣イク

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 あそびにこうよ！ 森の中へ
どんぐりはかせの森あそび研究所
- *06 特集 林業の現場で働く女性
Girls in the Forestry
- *12 手作りの文化を広げる
創り舎
- *13 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *14 ほっかいどう 森のイキモノSOS
北の海鳥を守るには
- *16 木育essay
ササとわたしのミステリー
- *17 Fの森の今を伝える
Fの森通信
- *18 コープ未来の森づくり基金報告
あすもりフォーラム 2024 など



Starting Column 森づくりのトレンド

あした 未来のための 市民による 森づくり

私が森林や林業のことを学び始めた1980年代の日本では、林業や森林管理は「男」の世界でした。林野庁や道庁、民間の森林組合や林業会社も、働く人はトップから現場までみな男性で、女性は庶務の事務か苗畑の作業員だけでした。

1990年代にアメリカ合衆国に調査に行き、驚いたのは、国有林などの森林管理組織で普通に女性が働いてい

て、管理職にも多くの女性が登用されていたことです。また林学卒だけではなく多様な専門を持った人々や、白人以外のマイノリティも活躍していました。

アメリカ合衆国国有林も、1960年代くらいまでは職員のほとんどを白人・男性・林学卒が占めていました。これに対して連邦政府が女性やマイノリティを積極的に採用すべきというアフーマティブアクションを進め

ることとしました。また国有林が林業生産中心の森林管理を行っていたことに対し社会的な批判が高まったことから、多面的な要求にこたえる管理を進めるために生態学やレクリエーションなどの専門家を積極的に雇用してきました。こうした中で多様性を持った国有林の職場が生まれてきました。

職員が多様化したことは、組織文化を大きく変えることにつながりました。かつて

の林学は林業生産中心の教育を行っていたこともあり、「白人・男性・林学卒」の組織は林業生産を積極的に進める軍隊組織のようでした。しかしジェンダーや専門性の多様化が進む中で、生態系に配慮しながら、社会の多様な要求に応えられる管理を進める動きが組織内部から生まれてきました。市民の声を反映するためのつながりづくりも進められました。社会的な圧力と、組織内部から

の変革の動きの中で、国有林では生態系保全と多様性を確保する管理へと抜本的な改革が進んでいったのです。

ある一つの目標を効率よく追及しようとするときは、多様性を持たない一枚岩の組織の方が適格的かもしれませんが、社会の多様性や変化を受け止め、これを反映していくことは、多様性を欠いた組織にはできません。

森林管理を進める組織をどのように構成していくかは、これからの森林管理をどうしていくのか、ひいては社会と森林とのかかわりをどう考えていくかに結びついている問題なのです。♣



柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学 名誉教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長
1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。
持続的な森林管理を多様な人々の協働で支える仕組みづくりを、ポスト資本主義を模索しつつ考え続けていこうと思います。
主な著書として『日本の森林管理政策の展開』、『保持林業』など。

どんぐりはかせの **森あそび研究所** その④ 虫探し 子どもたち は動く生き物 **虫** は子どもたちにとって触れることができる遊び相手。でも最近は虫を怖がる子どもが増えていきます。それは大人が怖がるから。大人が怖がると子どもも怖いものと思ってしまう。親子で生き物と触れ合って楽しい機会をたくさん作りましょう。

3 観察しよう！

捕まえた虫をよく観察してみよう。ふしぎなひみつがいっぱい見つかるよ！

虫メガネをつかってみよう

虫の目や口、足など細かいところを虫眼鏡で見よう！
 

スケッチしよう

よく観察するには、スケッチするのが良い。絵にかくことで気が付くことも多いはず。
 


上級編



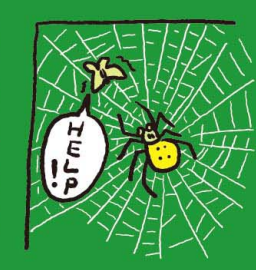
捕まえないで、観察しよう！

捕まえないで「生きているそのままの動き」を観察するのもおもしろい！

クモ

クモの巣を見つけたら、クモがどこにいるか見つけよう。クモの巣に虫がかかったらクモはどんな動きをするかな？クモが巣を作っているところもおもしろいよ！
 

アリ

地面を忙しく動いているアリ。虫？ミミズ？草のタネ？どんなものを運んでいるかな？餌をあげてみるのも面白い。「かつおぶし」と「砂糖」を用意してどっちを運ぶかな？
 

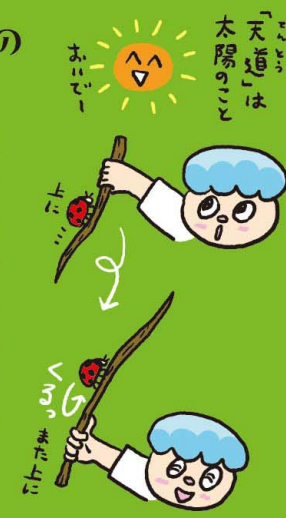

★そのほか、カタツムリやイモムシなども観察するとおもしろい。

4 あそぼう！

セミの抜け殻探し

春に鳴くエゾハルゼミ（5月～6月頃）、夏に鳴くエゾゼミとコエゾゼミ。最近は、アブラゼミや、ミンミンゼミなども良く見るようになりました。セミをつかまえるのは難しくても、抜け殻ならかんたん。たくさん集めたくなっちゃう。いくつみつけられるかな？
 

テントウムシの木登り

テントウムシをつかまえて、木の枝にのせる。テントウムシは上に向かって登り始める。てっぺんまで行ったら、枝をひっくり返す。何度やっても、上へと登る？上へ上へと登るから「天道虫」って名前なんだって。
 


2 捕まえてみよう！

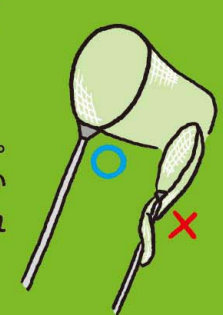
虫探しと言えば「虫とり網」と「虫かご」

「虫とり網」は、実は使いこなすのが難しい。はじめは、短く小さなものから練習して使えるようになろう。「虫かご」は、風通しの良いものがおすすめ。野外でプラケースの虫かごは、虫が暑さで弱ったり死んでしまったりする。

虫をつかまえる練習

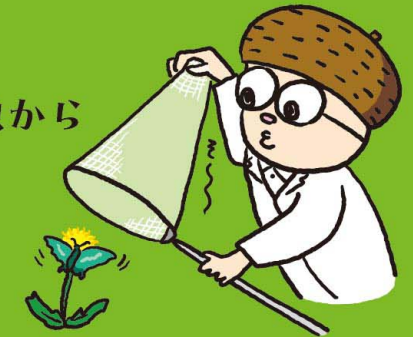
レッスン①

ネットを広げよう！

簡単そうで大事なポイント。網が絡まったままじゃないかな？ちゃんと網を広げて振れるようにしておこう。
 

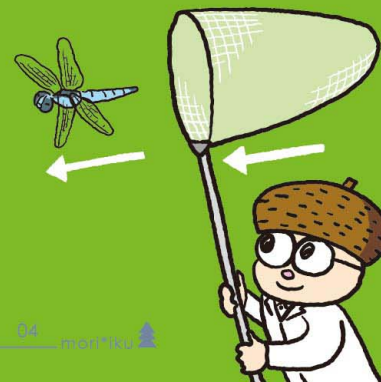
レッスン②

止まっている虫からチャレンジ

ネットの上をもっておいて、虫の上から網をかぶせる。
 

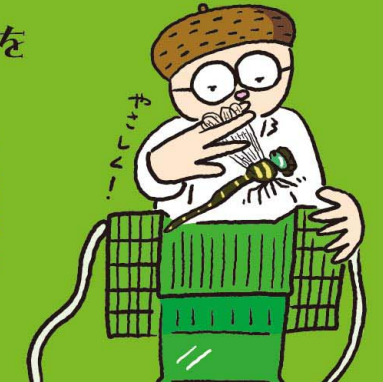
レッスン③

飛んでいる虫をつかまえる

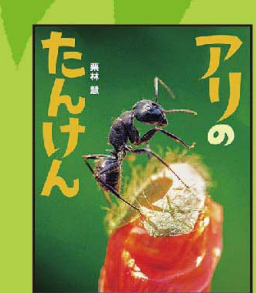
空中で網に虫が入ったら、逃げないように反転させるか、地面に伏せます。トンボなどは後ろから狙うといいよ。
 

レッスン④

虫かごへ入れる

せっかく捕まえたのに、虫かごに入れないと観察しにくい。ちゃんと手で虫を触って虫かごへ入れよう。傷つけないようにやさしく。種類によって持ち方もちがうよ。経験あるのみ！
 

アリのたんけん（小学館）

栗林 慧 著
 ★アリの目線で「こんにちは」いろんな虫と出会います。
 

増補改訂版 探そう！ほっかいどうの虫（北海道新聞社）

堀 繁久 著
 ★昆虫採集のポイントが、環境別に紹介。虫に興味を持つことが環境への興味につながってほしい。
 

昆虫の本紹介





Girls in the Forestry



林業の現場で働く女性たちは
森づくりに
どんな未来を見せてくれる？



“現場”に現れた女性たち

ひと昔前だったら目にすることは難しかったかもしれません。林業のあらゆる現場で女性が活躍している光景を。

ここ10年ほどで、建設や工事のいわゆる“現場”で働く女性が話題になるようになりました。森づくりや林業の現場でも同じで、女性を雇用する林業会社や個人で小規模林業を行う方など、さまざまなスタイルで森という現場で活動する女性が見られるようになっていきます。

そもそも林業をはじめとする“現場”には男性しかいなかったわけではありません。例えば炭鉱などの鉱山では女性が鉱石運びをしていましたし、林業

でも伐採後の苗の植栽などは女性が重要な働き手だったこともありました。しかしその頃の女性が活躍できるのはごく限られた仕事でした。しかもその後、産業の形態の変化によって現場からは女性の姿は見られなくなり、林業も「男の現場」になっていきました。

森づくり、何が変わる？

近年になってから女性たちがようやく手にした社会的地位の向上によって、女性が持つ職業の選択肢は増えたように思えます。また、現場仕事の機械化も後押しして、こうした現場で女性が働くことの社会的環境が少しずつ整ってきたといえるでしょう。

今、男社会だった林業の現場に女性が進出することで、林業や森づくりと

いうものはどのように変化するのでしょうか。そしてそれはかつて女性が携わっていた頃の林業とはどこが違うのでしょうか。

今回は林業で働く女性やその経営者に話を聞きました。そこで見てきたものを通して、女性が参入することで生まれる新しい森づくりの姿を想像してみることにします。



林業に興味を持ったり、林業で働いたりする女性が増えつつある近年ですが、彼女たちにとって林業で働く魅力とは何なのでしょう。いわゆる3Kと呼ばれる現場仕事で働きたいという理由はどんなことなのでしょう。

実際に現場で活躍する女性たちにお話を聞いてみました。

目に見える成果がやりがい。林業は楽しい。

林業の現場での仕事は大きく分けて二つあります。ひとつは木を育てるために植樹をしたり草刈りをして、木々が成長する環境を保つ「造林」と、もうひとつは育った木を木材にするために伐採し、運び出すための「造材」です。今回お話を聞いたみなさんの多くは、夏は造林に、冬は造材に従事されているとのこと。

林業で働きはじめるきっかけはみんなそれぞれ。例えば堀川林業(株)で4

年目を迎える田村さんはお父さんが同じ会社で林業に従事していたので、その影響。北の山子団協同組合に所属する林業10年目のベテラン、土田さんは山や自然が好きだったから、自然の中で働ける職種を、という具合です。やっぱりみなさん共通するのは、「自然の中にいるのが好き」ということ。

林業の魅力について感じているところも共通しているのがおもしろいのです。「目に見えて成果がわかる、やった感がある。成果が見えることが魅力ですかね」と話すのは堀川林業の宮城さん。8年目で経験豊かな宮城さんは造林(草刈りや苗の植樹)作業の時に、自分が刈り払ったあとや植栽後の山を見て、これだけ働いたんだ、と感じられる達成感が魅力なのだそう。そしてこの達成感については、お話を聞いた全員の共通した意見でした。

また、同じく堀川林業の加賀さんは今年2年目の新人ですが、自然の中で



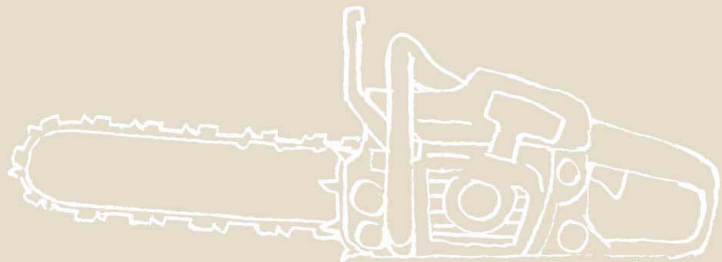
土田 瑞恵さん
所属：北の山子団協同組合 林業キャリア：9年
登山が好きで自然の中で働ける仕事から林業へ。将来は森の資源を広く生かした小規模で持続的な林業を自分でもやっていきたいとのこと。

体を動かす仕事に充実感を覚えているとのこと。同じように、山で四季の移ろいを感じながら汗を流すことの魅力もみなさん口にされていて、自然の中で働くことの素晴らしさについて改めて気付かされます。

もうひとつ、樹木を育てる楽しみというものもあるのだそうで、土田さんは「自分が植えた木が、何年後かに見ると



玉切りしたカラマツを満載したフォワーダーを巧みに操る田村さん



#1 Haruna Tamura



田村 春菜さん
所属：堀川林業株式会社 林業キャリア：3年
父の影響で林業に興味があり、チェーンソーや重機を使って山の中で働きたいと思っていたので入社。大変だけど汗をかけた分の達成感がやりがいに。

大きく育っていたり、間伐の後に森に光が差し新しい木の芽が出てるのを見るとうれしくなります」と、林業家ならではの長い時間軸を持った仕事の魅力も教えてくれました。人工林の木(植えた針葉樹)は50〜60年が伐期とされているので、その時まで見守れるのかはわからないにしても、田村さんが「長くこの仕事を続けて、自分が植えた木を自分で伐倒できたらいいな」と言うように、木の成長を長く見てられるのも林業のみならず、森づくりの醍醐味といえそうです。

現場に出ると、意外と男女差なく働ける

一方で、男性の職場であった林業で女性が働く困難はどのようなものなのでしょう。みなさんが口を揃えるのが、やはり体力面。「重いものを運んだりする時には腕力があるので、その時はどうしても男性のようにには動けないです」と北の山子団協同組合の中川さんは言います。フィジカル的にはどうしても女性にとっては厳しい職場であって、そこは一般的なイメージと変わらないようです。

また、トイレや着替えなどもやはり大変で、初期の頃は現場にトイレもなかったのだそう。そうした不都合はコミュニケーションによって少しずつ解消してきたと思う、と話す宮城さん。「コミュニケーションの問題は林業特有のもので



50年生のカラマツを伐倒する女性スタッフ



はなく、どこでも起こりうることで、その解決に向けては努力していきたいです。女性が働きやすいという発信が、いろんな方にとって“自分も働けるかもしれない”と思う一助になればと思います」。ぎっと宮城さんの対話のような努力が狭い門戸を開き、林業、ひいては森づくりに多様な人が関わる足掛かりを作っていくのでしょう。

一方ではみなさん、「仕事をする上でほとんど男女差は感じないですね」とも。それは、現在の林業の多くの作業

が機械化されているということもあって、内容的には男女の差なく仕事ができるということもあるようです。

「働くまで考えていたような差はなくて、意外と男性と同じ目線で仕事ができます」と、林業が女性にとって決して働きづらい職業ではなくなっていると話すみなさん。ですから、林業に興味があったら女性でもぜひ飛び込んでみてほしいとのこと。「林業体験や見学、インターンの制度があるので、興味があったらぜひやってほしい」と土田さんと中川さん。

林業で生きていく「未来」

さて、世間の一般的なイメージと違って普通に林業現場の仕事をこなす彼女たちは、この先どんな将来を描いているのでしょうか。

若手のみなさんは林業者としての技術や働き方の向上を目指しているようで、林業を始めたばかりの加賀さんは

#3



宮城 愛さん
所属：堀川林業株式会社 林業キャリア：7年

理系が好きで、大学で森林科学を専攻したことから林業へ。目に見えて成果がわかる“やった感”が魅力。林業に興味を持つ人が広がるとうれしい。

Girls in the Forestry

「山のことを考えて仕事の判断ができるようになりたい」と言いますし、中堅ともいえる田村さんは「後輩の希望になれるような仕事のできる先輩を目指しています」と、前向きな目標を話してくれました。

林業10年を数える土田さんは、森づくりに関しては「その森に合った施工を考え、できるようになりたい。現況の林業と小規模林業を学んでいる最中なので、どちらの知識や経験も活かせるといいなと思います」と、技術的な向上に加え、未来へのビジョンとしてははっきりしたイメージは模索中と断った上で「林業だけでなく“森林業”を目指したい」と言います。森には木材だけじゃない、いろんな資源がある。その資源を多角的に使うのが森林業で、これから木工で食器を木で作ったりすることなども含めて、将来も林業や森と関わる生き方を考えていきたいとのこと。

「カッコいい！」
でも社会的な地位はまだまだ。

話を聞いている分には普通の職場で

ある林業の現場。かといって問題がないわけではなさそうです。

「林業は比較的ブラックですね」という言葉が聞かれるように、労働環境や賃金は十分とはいえないのが林業の業界です。“現場労働”という一般的なイメージも今だに良くはありません。家族や友人から「やめておきなよ」と諭される場面や、林業会社に就職しても希望する現場仕事には入れてもらえなかったこともあるとか。でも、今は「周囲の人たちに林業やってるよ、と伝えるとカッコいい！って言われますよ」と土田さん。さまざまな現場で働く女性が増えてきているからか、現場で働く人のイメージは少しずつ変わってきています。何より、自分たちの選択で自分らしく林業に向き合っているのは、きっと今の時代だからこそその姿で、森で働く生き生きとした彼女たちの姿はやっぱりカッコいいのです。

経営者目線から。

今回お話を聞いた女性たちは林業会社や組合に所属しています。女性を雇

#5 Shiori Nakagawa



中川 菜さん

所属：北の山子団協同組合 林業キャリア：1年
環境問題がきっかけで自然のことを知りたいと思い、林業に興味をもった。毎日少しずつ山にいる生き物について知ることが楽しい。

用することについて経営者の方はどう見ているのでしょうか。

「男だけだと現場のコミュニケーションや気遣いが少なくて、仕事に支障が出ることもあるんだよ。女性だと色々言ってくれるでしょ？」と話すのは三笠市の歴史と信頼を積み重ねた林業会社、堀川林業（株）の高篠さん。女性のこまめなコミュニケーションを期



まだ林業キャリアが短い中川さんはさまざまな経験を積んでいる最中。伐倒後には先輩の土田さんからのアドバイスにも真剣に聞き入る



#4 Yoko Kaga

加賀 洋子さん

所属：堀川林業株式会社 林業キャリア：1年
山菜やキノコを採るのが好きで、自然の中で働きたいと林業に。季節の移り変わりなどを楽しめるし、体を動かすので健康にもいいとのこと。



ハーベスターを操る
土田さん。
機械化によって
男女の差なく
できる作業もある



待して採用しはじめたのは10年ほど前から。すると、こまめな気づきや提案での効果か、ベテランが丁寧に技術を教えたり、安全管理で現場に緊張感が出たりするなど良い効果があったとのこと。「外からの目も変わるんです。イメージが良くなる」。と、外部からの評価も上がったそう。「林業は危険な割りに賃金も立場も低い。それを改善するために中央省庁にかけあうのだけど、林業の待遇を良くするためにも、男性も女性も同じように仕事ができることは大きなアピール材料にもなるんだ」と、林業全体の底上げのためにも女性を雇用することの意義を話してくれました。

北の山子団協同組合は設立して4年目になる若い林業組合。個人では取れない仕事を取ったり、保険や機械類を共用するなど、個人でもより林業をしやすくするために志のある林業家が集まって組織されました。代表の福山さんは、女性を入れることについて「特に理由があったわけじゃないよ」と言います。今は林業といっても機械化が進んで男女の差はなくなっているし、特段女性だから入ってもらった、という理由はないとのこと。「今まで偏見があったと思う。けど、これからはそれ

も少なくなって、女性でも働きやすくなっていくんじゃないかな」と話してくれました。

ともに女性を雇用していく上で悩まないわけではないようで、やはり結婚や出産の時にどう対応するのか、人手不足の中で難しい判断になるだろうと認識しています。しかしそれはどの業界でも同じこと。そうした意味で、林業特有の問題というのは感じないというのが経営者側の認識のようです。

林業のイメージを変える
一歩になるのかも。

日本において、林業を含む「森づくり」は残念ながら社会的注目度が高いとはいえません。欧米では環境意識の高まりなどもあって森をつくることのクリエイティビティが注目されており、例えばドイツではフォレスター（森林官）は憧れの職業で、日本とは正反対といえるかもしれません。

その林業社会を女性をはじめとする

多様な人々が参入することで風通しがよくなり、世間からのイメージが上がることは、ひとつには欧米のように、林業の社会的な価値が上がることにつながるかもしれません。そしてそれは森づくり全体の価値の底上げでもあるといえます。

2024年、世界の平均気温はパリ協定の気温上昇の抑制目標値であったプラス1.5℃を超えてしまいました。地球温暖化が深刻になり、気候変動による気象災害が頻発する中、林業を含む森づくりの社会的な役割はますます重要になっているのではないのでしょうか。そんな中で森づくりの社会的な地位が見直されるようになれば、世の中における意識も大きく変わっていくのかも知れません。森づくりが見直されて気候変動対策に社会が向き合うようになる、そのためのひとつの波紋が、女性をはじめとした多様な人々が参画した、明るく風通しの良い林業・森づくりの姿なのではないかと思います。✂



福山 寛人さん

北の山子団協同組合 代表理事

北の山子団協同組合
☎ 01658-6-4283

個人の林業家がより良く働けるように2021年に上川町で組織された組合。林業以外にも多角的な森林資源を活用し、森と社会と人をつなぐ健全な森づくりを目指している。

高篠 和憲さん

堀川林業株式会社 会長

堀川林業株式会社
🌐 www.horikawa-ringyo.jp/

三笠市で明治40年ごろに創業した老舗林業会社。持続可能で環境に配慮した林業と高品質の木材生産を担っており、国や道など行政からの信頼も厚い。



創り舎



<https://www.instagram.com/tsukurisya/>

“作る文化”を育てる



オニグルミやシラカバをはじめとしてヤナギやヤマブドウなどの樹皮を「ヒゴ」にして作品を編む。ヒゴを作るまでが全体の作業の8割を占める。地味だけど大切なその仕事の上により樹皮の個性を引き出した作品が生まれる。

ごわごわした樹皮で作られたかわいらしいフォルム。手におさまると、その造形から醸し出される温かみからか、ずっとそばに置きたくなる。まるで木を一本、そのままカゴにしたような作品をつくるのは、十勝を舞台に樹皮のカゴなど、さまざまなものを自分で作る「創り舎」を営む小原 康恵さん。

もともと東京で働いていて、北欧の雑貨が好きだったという小原さん、フィンランドのシラカバのカゴがお気に入りでした。結婚を機に帯広へ帰郷、十勝にはシラカバがたくさんあったので自分でも作れるのではないかとカゴ編みの教室に通い始めたのですが、コロナ禍で中止となってしまいました。その後、採取しやすい地元の材に注目し、シラカバやオニグルミ、ヤナギの皮を使って独自のカゴづくりをはじめたのだそう。

「オニグルミは、皮の表と裏で色合いが全然違う、それを作品に生かせるし、ヤナギは時間が経つと色が変わるし、経年変化も楽しめる。それが樹皮の魅力でしょうか」。それぞれの樹皮にはそ

れぞれの魅力があるといいます。カゴの編み方も、北欧の手法だけでなく、日本のさまざまなカゴ編みの技法も取り入れている、小原さんが作るカゴの表情は実にさまざま。今でも東京までカゴ編みを習いに行っている手法を学び続けているとのこと。

もともと、ものづくりが好きだという小原さん。服などの生活に使うものを手作りしてきて、カゴづくりもその延長なのだそう。「100円ショップなどでも安く立派なカゴは買えるのだけど、そうしたものは捨てるのが前提の商品。そうではなくて、使って、壊れたら直して、それでも使えなくなったら最後は薪にして暖をとる、そうして使い切る道具の文化を、十勝につくりたいんです。」と話します。例えばある道具を自分で作ったら、買ったものより大切に使うのではないのでしょうか。こうした道具づくりは、意外と難しいといえます。「カゴの基本的な形を作るのはみなさんが思っているよりも簡単です。形は二の次で、自分で使うなら編み目に隙間があってもおもしろじゃないですか。」と、実は誰でもできるよ、ということも伝えていきたい。そのためにワークショップや教室な

ども開いていて、ものづくりを楽しむ人を少しずつ増やしているのだそう。

「いつか、木を植えて、育てて、その木からヒゴを取ってカゴを編む、最初から最後まで通してのワークショップをやりたいですね」と話す小原さん。「大量生産、大量消費の生活って、始めてしまうとそこから出られない。みんな便利すぎるのに疲れている面もあるんじゃないかな」。じっくりと時間をかけてものづくりをする。そんな習慣が暮らしの中にひとつあったら、社会はだいぶ変わるのではないかと、そうした時間軸を思い出すのも、ものづくりの大切な側面ではないかと、小原さんは話してくれました。

また、樹皮のカゴは森の入り口でもあると話します。「カゴに興味が出ると、その材料にも目が行きます。材料が木の樹皮で、それをいつ、どうやって採取してヒゴをつくるのか、ということを知るには木のこと、森のことにつながっていく。そこから森にも興味を持ってもらえたらうれしい」。

カゴの向こう側に森と自分の暮らしや生き方がつながる、そんな素敵なものづくりへの思いが、小原さんの編むカゴから十勝に広がっています。✳

Column
植樹の図鑑

知っておこう。私たちが植える木にも物語がある。

大きな木の 小さな物語

②4 イヌエンジュ

イヌエンジュは、高さ15m・太さ30cmほどになる落葉広葉樹です。北海道から本州中部にかけて自生しています。札幌市内では街路樹や公園樹として利用されています。

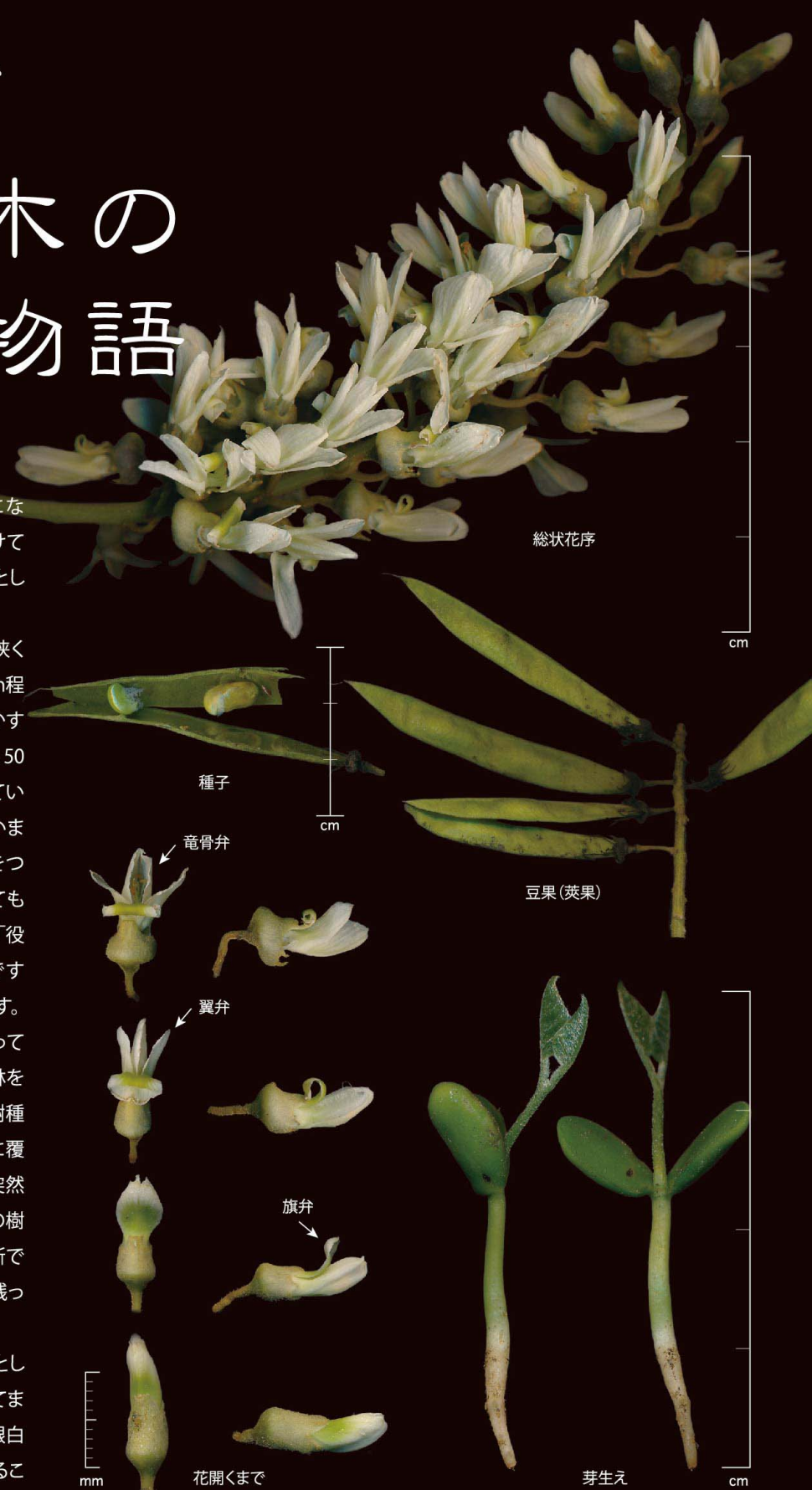
切ってみると、外側の辺材と呼ばれる部分は狭く黄白色で、内側の心材は暗褐色です。かつて、4m程度の真っ直ぐな材を採れる木は、この二色を生かすように製材して床柱として利用されていました。50年ほど前のことになりますが、冬山造材をやっていたとき、細い広葉樹はパルプ材として出荷していました。でもイヌエンジュだけは別扱いで、床柱をつくっている業者さんに山の現場まで取りにきてもらっていました。植物の名前に「イヌ」が付くと「役に立たない」とか「劣る」という意味になるのですが、決してそんなことはない樹種だと思っています。

山に入ると、沢頭に近い、岩がゴロゴロ転がっているような斜面で、小規模なイヌエンジュの純林をみることがあります。光をめぐる競争には弱い樹種のように、樹高が7～8mまで成長してもその上に覆い被さるようにシラカンバなどが生えてくると突然枯死してしまいます。純林を形成するのはほかの樹木が生育できないような厳しい環境条件の場所です。より成長が速い競争相手が育たないので残ったのでしょう。

イヌエンジュは芽吹きも花が咲く時期も高木としては遅めです。芽吹きはほかの木々が葉を出してまわりが緑になったころ。このときの葉の裏には銀白色の細かな毛が密生しているので、輝いて見えることがあります。花は7月の末になってから咲きます。夏の花です。道内に生える高木としてはハリギリと並んで最も遅く咲く部類に入ります。

秋にはキヌサヤを細長くしたような果実（豆果または莢果）^{とうが} になります。開くと、まさに「豆」。『マメ科』ですものね。

今年はちょっとずれた芽吹き探しや夏のお花見、してみませんか？ イヌエンジュで。✳



text/images 孫田 敏

‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士（建設部門：建設環境）。著書：アトリウムと植生（積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著）、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方（水辺域管理—その理論・技術と実践—：砂防学会編）、森林管理と市民参加（北のランドスケープ 保全と創造：浅川昭一郎編著）WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



参考文献 佐藤孝夫, 2011, 増補新版 北海道 樹木図鑑, 345pp, 亜細亜社
北海道立総合研究機構 林産試験場 道産材データベース, イヌエンジュ, <https://www.hro.or.jp/forest/research/fpri/koho/default/doumoku-index/enju.html>
画像材料提供: 雪印種苗株式会社 (芽生え)



数が減少し、地球上からいなくなってしまうかもしれない、**絶滅危惧種**と呼ばれる生きものがあるよ。

北海道には世界でも貴重な海鳥の繁殖地がある。その海鳥の中にも、環境省や北海道のレッドリスト※に入っている種があるんだ。

鳥たちを守るために何ができるの？
今回は北海道の海鳥たちのことを考えてみよう。

※ 絶滅のおそれのある野生生物のリストです。国際的なものと環境省や地方公共団体などが作成する国内のものがあります。

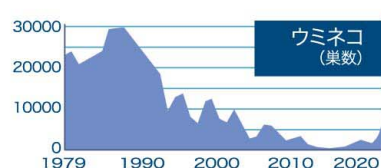
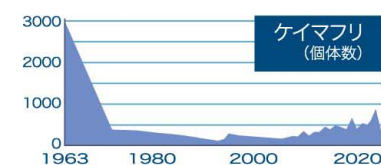
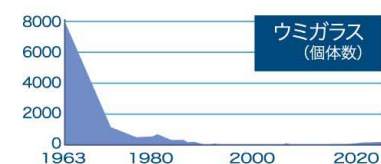
その2 北の海鳥を守るには 天売島編

地球上には約10,000種もの鳥類がいます。しかし海鳥は約360種しかいません。海鳥の生活の中心は海ですが、陸で卵を産みヒナを育てます。



100万羽の海鳥の楽園、天売島から

羽幌町の沖に浮かぶ天売島は「海鳥の楽園」です。高さ100m以上の断崖が続く西海岸は、3月から8月にかけて8種類、約100万羽の海鳥の繁殖地です。しかし一部の海鳥類はどんどん減少。身近なイメージのウミネコやカモメ類も減っています。



崖で子育てをする
ピンクの足
オオセグロカモメ

クチバシの先に赤い斑がある。他の海鳥の卵やヒナを食べることがある。

ウミウより小さいヒメウ。繁殖期にはクチバシの付け根が赤くなる。

絶滅危惧種
環境省RDB
絶滅危惧ⅠB類

ウミウもヒメウも
崖で繁殖して
子育てをする

鳴き声から
オロン鳥と
呼ばれている
ウミガラス

夏羽の色と陸での歩行姿がペンギンのよう。

絶滅危惧種
環境省RDB
絶滅危惧ⅠA類

ウミネコは黒崎海岸で
子育て。猫のような
声で鳴く

足が黄色く、クチバシの先に
黒と赤の斑がある。
ウトウの巣穴近くで魚を奪う。



天売島の海鳥で
一番小さいウミスズメ

5月から6月に沖合で見られ、
夜中に巣へ戻る。

絶滅危惧種
環境省RDB
絶滅危惧ⅠA類

ケイマフリは
ケマ(足)フレ(赤い)という
アイヌ語が名前の由来

日本の北部とその
近海にのみ生息。
世界のどこにも数が少ない。

絶滅危惧種
環境省RDB
絶滅危惧Ⅱ類

絶滅寸前！ ウミガラスを守ろう

かつては北海道各地で繁殖していたウミガラス。今は天売島が日本で唯一の繁殖地になってしまいました。1960年代には8,000羽(推定)でしたが、2002年頃には13羽まで激減！そこで、環境省が中心となり、保護対策に取り組んでいます。2024年は122羽が飛来しました。



●捕食者から守る

卵やヒナを襲うハシブトガラスから守るため、**営巣地にデコイを置いたり鳴き声を流してウミガラスを呼び寄せ、繁殖数を増やしている。**
ハシブトガラスの捕獲も行う。



おそろえにくい
断崖を営巣地にして
集団で繁殖するウミガラス。

●海鳥の混獲被害を減らす

潜って獲物をとるウミガラスは、網にかかって溺死することもある。

北のもい漁業協同組合は海鳥が漁具にかからないように、洋上でのデータ収集に協力している(羽幌町「シーバードフレンドリー」認証制度※第1号の活動)。

※ 羽幌シーバードフレンドリー推進協議会がつくった認証制度を通じて、地域の事業者と一緒に、海鳥に優しい地域づくりを進めている。

●ノラネコ問題を解決！

「天売島ネコ飼養条例」を定めて飼い猫を登録制とし、ノラネコの捕獲・譲渡を行ったことでウミネコの繁殖数が増えた。現在は外来種のドブネズミ対策が進められている。



●海の問題が心配！

・**海洋プラスチック** 人が捨てたプラスチックゴミが世界中の海岸に漂着し、海の生き物や生態系に影響を与えている。ゴミを食べてしまう海鳥も増えている。

・**餌不足** 気候変動、水温の上昇で天売島周辺の魚の種類が変化している。それにより、海鳥のエサとなる魚が減少。

・**船の海難事故による重油などの流出、洋上風力発電の衝突事故への対策も重要。**



私たちができること、 海岸漂着ゴミの削減

・羽幌町と天売島の海岸で「海鳥を守る海岸清掃」を行なっています。今後の清掃活動の予定について、北海道海鳥センターのHPなどをチェックして参加してみよう。

・海岸に漂着するプラスチックの7割は陸上から出たもの。私たちがゴミを減らすこと、きちんと処理することが海鳥を守ることに繋がります。



つながっている、 海と大地の豊かさ

森の恵みは川を通じて海の森(藻場=海藻が茂る場所)に運ばれます。

ホッケの稚魚やイカナゴは藻場でプランクトンを食べて育ち、海鳥のエサになります。魚を食べて海鳥が出した糞は土壌を豊かにします。その豊かさが海に運ばれ、ウニや昆布を育てるのです。



北海道海鳥センター www.seabird-center.jp/

環境省と羽幌町が協働で運営する、日本で唯一の海鳥専門施設。海鳥類の調査・研究、ウミガラスの保護増殖事業などを行なっています。

morinoko
factory



新岡薫/エトブン社、モリノコ商会

北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いている、札幌出身のイラストレーター。森と湿地、動物園、水族館、博物館の散策を好む。今回は大好きな天売島の話。海鳥同様、魚好きなのでも再訪したくなりました。
<https://etobunsha.com>



宮本尚/モリノコ商会

森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。環境保全やヒグマ対策の仕事をしながら、歌をつくって演奏するシンガーソングライター。宮本尚Song-Gardenというバンドでライブハウスなどで演奏しています。
<https://naoeaster.wordpress.com>



ササとわたしのミステリー

それが起こったのは去年の春だ。いや、それよりも以前から起きていたのかも知れない。変化はゆっくりとひそやかに進んでいたのだろう。現場は『わたしたちの森』。クマイザサがびっしりと生えていた林の中の出来事である。

春、私が『ツンツン』と呼んでいるササの子が、ほとんど見当たらなかった。いつもなら暖かい陽気に誘われて、草刈あとの空き地にボコボコと気持ちよさそうに顔を出しているのに。食べるには小さすぎるし、放っておくとすぐに大きくなってはびこる、厄介者がいないのはラッキーかもしれないが、いつもと違うのが漠然とした不安をさそう。そのうちに見慣れない植物があちこちに生えてきた。線香花火の終わりがけみたいな花穂。やや、これはもしかして噂に聴くササの花ではないかい？と思う間もなく一斉にササが枯れ始めた。ほかの場所のクマイザサも全部である。立ち枯れて茶色くなった藪が一带に出現した。

「わたしたちの森」とお知り合いになってから、初めての出来事にオロオロ。これを好機と見てササを一掃する気満々の夫を横目に、これから何が起ころのだろうと、心が騒ぐ。

暫くしてササの花穂は小さな実をびっしりと付けた。飢饉の時に食べたというからどんな味だろうかと一粒口に含んでみる。するとふいに古い記憶が立ち上ってきた。

多分、とても幼い頃、わたしはこの実を口にしていたことがある。幾つだろう？5歳くらいか。この舌触り、こっくりとした豆乳のような味。同時に手の中にある紫がかった茶色の穂の形もわたしの記憶の中にはあった。

五感のうちでも味覚は記憶の中に埋もれがちである。デリケートすぎて言語化するのが困難だからだろう。だがそ

れだからこそ、深いところに手つかずのまましまわれて、何かのきっかけで瑞々しくよみがえってくる。

それが本当にあったことか、それともわたしの記憶違いか、知ることはむずかしい。

ササは土中に地下茎を伸ばして繁殖する、イネ科の植物である。一定の期間を経て開花し、ほぼ同時に葉も根も全て一斉に枯れる、長期一回開花型という特徴をもつ。その周期は数十年から120年といわれ、推定される年数に幅がある。サイクルが長いためにデータが少なすぎて、60年前に幼いわたしが出会っていたかどうかは調べられなかった。

そもそも、ササはどうしてこんなに長い開花周期をもっているのだろう。遺伝子の中に開花(ササ枯れ)のタイミングが刷り込まれているという説がある。同じ株の一部を別の場所に移植したら、違う環境で育っていたにも関わらず、同時期に枯れたケースがあったそうだ。だとしたら、遺伝子の中にそういったトリガーを滑り込ませなければならない重要な何かが、ササの長期一回開花システムの中に秘められているのではあるまいか。一度全滅するという、大きなリスクを冒してまで、生き残るための戦いを選択した生命のしたたかさ。

二度目の春、枯れた笹原をきれいに刈り払った空き地に、ミズナラの幼木がすくすくと伸びていた。そのすぐそばに実生(種からそだった)のササが小さくてあえかな葉を、木洩れ日に向かって広げているのを見つけた。あどけない姿に思わずそっと、柔らかい葉を撫でてみる。これから「わたしたちの森」を含めた世界中の森が、いや、生きとし生けるもの全ての生命がどう変わっていくのか、時の許す限り心を込めて見続けていかなければならないと、思っている。✿



Text 齊藤 香里

介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに「よつてい木育倶楽部」を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

Fの森から

森づくりWS 2024 秋

秋の「Fの森」。 どんな発見があるのかな？

9月16日は気持ちよく晴れた秋の空でした。「Fの森」にもさわやかな風が吹いていて歩くのもいい感じ。今回のワークショップは、まずは秋に実る木のタネの観察をしながら森を歩いてみました。

まずは木のタネってどんなもの？と、ガイドの鈴木さんがさまざまなタネを見せてくれました。タネにもいろんな形があって、それぞれ違う作戦でタネを速くに飛ばすのです。その後はいよいよ「Fの森」の中へ。木村さんにガイドをしてもらいながら木々のタネを探しますが、この時は季節的なこともあるのでしょうか、あまり多くは見つかりませんでした。それでも、いずれ「Fの森」の木々から採ったタネから苗を育て、森づくりに使っていきたいね、とみんなで話したのです。

午後からは今まで植樹したエリアを見ながら見晴らしの良い「ヒバリーヒルズ」に向かいます。よく育っているエリア、思うように育っていない木々などを見ながら、この年から始めた新しい草刈りの手法、「ツボ刈り」の説明を聞いたりしつつ、ヒバリーヒルズから秋の「Fの森」全体を見渡しました。

最後は「あかえぞ口」近くに戻って来て、参加者のみんなで木の板に描いた樹名板を2014年植樹エリアにかけてまわりました。みんな思いを込めて樹種の名前を描いたので、名札をもらった木々もなかうれしそうに見えました。無事に冬を越して大きく育つように祈りながら、参加したメンバーは「Fの森」を後にしました。また雪が解けたら会いに来てくださいね。



トレイルの草刈り。
手鎌で丁寧に



「Fの森」の森づくりの
説明を受ける
職員のみなさん

コープの職員さんと草刈り

実はコープさっぽろの職員さんでも「Fの森」のことを知っている人は少ないのだそうです。せっかくの取り組みを内部の人も知らないなんてもったいない！ぜひ森づくりに関わってほしい！と、コープの職員さんが「Fの森」に来る機会を少しずつ増やしていくことになりました。

8月28日はトレイルの草刈りを行いました。参加したのは広報を担当する職員さんたち。鎌を持つのも初めての方もいますが、説明を受けてトレイルをすっきりきれいに草刈りすることができました。

その後は「Fの森」の様子を観察しつつ、看板のペンキ塗りなどの作業も行いました。「気持ちいい場所ですね。また来たいです！」との感想もありました。この活動は今後も広がっていく予定です。ぜひまた違う季節の森を見に来てください！



木のタネについて知ろう！
風に乗って飛ぶのはヤチダモのタネ！



草のタネも観察しよう。
これはオオウバユリのタネだよ



オニグルミの木、
クルミの実は見つかるかな？



ヒバリーヒルズから
「Fの森」と、その向こうまで見渡す。



植樹した木に名札をつけたよ！
元気に大きく育ってね！

Event Report 森づくりを語ろう

あすもりフォーラム 2024
森づくりと自然保護、
生態系保全について

11月29日にオンラインで開催されたのは「2024年あすもりフォーラム～森づくりと自然保護、生態系保全について～」。森づくりとともに環境保全に取り組む団体がその活動や意義を話してくれました。

イベントダイジェスト

森づくりと自然保護、生態系保全

コープ未来の森づくり基金運営委員長 柿澤 宏昭

まずは柿澤委員長による話題提供。オホーツク海が世界有数の豊かな漁場となっている要因はアムール川流域の広大な森林や湿地であること。森が人の暮らしの豊かさを支え、逆に人が自然を守ることで漁獲高が増えた浜中町やトキを守るための田んぼづくりがブランド米として売れていることなど、人の暮らしと自然を守る営みの大切さについて話しました。

事例②

トラストサルン釧路の自然林再生活動

NPO 法人トラストサルン釧路 黒澤 信道氏

釧路湿原が国立公園となったときに湿原の水源地となる周囲の丘陵地帯や対象外となった湿原は保護されず、開発の対象となったためにナショナルトラスト手法で保全活動を開始したのがはじまり。森づくりなども平行して行っていて、環境回復は一部で成功していますが、民有地は皆伐やメガソーラーの開発が盛んになるなど、新たな課題も生まれているのだそうです。

まとめ

もっと知ろう、地域と自然の関わり

質疑では国立公園内にメガソーラーが建設された理由や、保全型の森づくりの手法、保全する土地の購入についてなど質問が出されました。保全というただ守るだけという印象を持ちがちですが、保全することで地域が豊かになるという図式がこのようにはっきり示せると、地域内外の人たちの見方も変わるのかもしれない。地域と自然というものを改めて見直すきっかけとなるフォーラムとなりました。✳



あすもりフォーラム 2024 のアーカイブは動画チャンネル「コープ未来の森づくり基金TV」からご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=uz-QliW17as>



事例①

この湿原を未来の子どもたちへ

認定 NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト 小川 浩子氏

霧多布湿原は一面のエゾカンゾウが咲き誇ることで有名ですが、湿原は豊かな海産物を育み、水質を浄化して酪農にも貢献して、地域産業に大きな恵みをもたらす存在です。このNPOは、土地を買収することで保全するナショナルトラスト運動によって、地域の宝である霧多布湿原の保全を進めています。同時に湿原ファンをつくるためにエコツアーをするなど、地域外の支援も集めているとのこと。

事例③

釧路地区委員会の活動交流

コープさっぽろ理事 釧路地区組合員活動委員長 立澤 留美

釧路地区の未来の森づくりは白糠町の協力で現在も行われており、また、霧多布湿原ナショナルトラストやトラストサルン釧路とは交流していて、植樹やゴミ拾いなどの活動をしています。こうした活動は継続が大切で、美しい自然と景観は当たり前にあるものではなく、多くの守る努力が背景にはあることを覚えておかなければなりません。今後も学び、活動を続けていきたいと思っているとのこと。

Friends

森づくりの仲間

2025年度のあすもり高額助成を受けた3団体をご紹介します。それぞれの森づくりが北海道の森と人を豊かにつなげていきます。

一般社団法人
北海道札幌南高等学校林

<http://www.rikka-forest.jp/>

1911年に行啓記念植林用地として始まったものの、戦中に木材供出で裸地になって再出発、1956年に学校林として指定された波乱の歴史を持つ森です。今は立派な森となっており、プロの林業家との連携によって高密度の細い作業道を整備して入りやすい森をつくり、皆伐をせず、弱い間伐と実生の育成を取り入れて持続可能な森林施業をしているのが特徴です。また、高校生をはじめとして森づくりに興味のある市民やトレイルでのスポーツを楽しむ人など、多くの人に整備に関わり、森に来てもらい、楽しんでもらうことも目的として、「造林育人」をキーワードに環境と共存できる森づくりを理念として活動しています。



恵庭ふるさと100年の森

<https://www.furusato100forest.com/>

恵庭の「北清建設」が薪ストーブの薪づくりのために管理しはじめた森ですが、子どもたちにも「ふるさと」の森を持ってほしいと森を整備し、自然体験活動のフィールドとして活用しています。森でのイベントを主催するほか、近郊の幼稚園や学童クラブ、札幌のフリースクールなどの活動や、カフェやピラティス、ヨガなどを行う森でのフェスに会場を貸すなど、たくさんの人たちが森に親しむ機会を提供しています。森の保守・管理は馬搬を取り入れたり、父親たちの有志によるDIYで行ったりと、自ら学び、動くのが基本。今後は学校など公教育との連携を深めるほか、子どもからお年寄りまでが来て楽しめる森づくりを進めていく予定です。



あさひかわサケの会

https://www.facebook.com/asahikawasirosake/?locale=ja_JP

かつて旭川の石狩川にもサケが上ってきていましたが、農業用水の取水の工事によりなくなりました。その後、魚道が整備されたことからどの程度サケが回帰するのかを試験するため、サケの稚魚を放流した事業から活動が始まりました。近年、石狩川の生態調査から川が痩せてしまっていることに危機感を抱き、石狩川周辺の里山環境を回復させる必要があると、「旭川森林ボランティア倶楽部」と手を組み、森の整備を学び、実施しています。また、河川のゴミ拾いやイベントでのパネル展示のほか、サケの料理教室などを行って、サケの魅力の普及に取り組み、「石狩川を野生のサケのふるさとに！」をスローガンに、旭川に多くのサケが戻り、サケ文化が再び根付くよう活動を進めています。



Report

あすもり・森づくり助成金
森づくり団体助成 贈呈式

3月3日、寒気の戻りで寒さもひとしおとなったこの日、札幌会場とオンラインで道内各会場をつなぎ、第15回の森づくり団体助成贈呈式が行われました。

目録の贈呈の後に行われた活動報告では、今回高額助成を受けた「一般社団法人 北海道札幌南高等学校林」、「恵庭ふるさと100年の森」、そして「あさひかわサケの会」より活動紹介と助成金活用の説明があり、それぞれの特色ある活動と森づくりの報告に耳を傾けました。質疑応答では「森林施業や林道づくりなどの活動は会員組織なのか、それともプロの林業家に委託しているのか」や、「山奥の活動場所では水道やトイレなどのインフラをどのように設置しているのか」などの質問が出され、みなさん活動について興味深く話を聞き入っていました。

今年も個性あふれる団体がそれぞれの特色を生かした、多様な森づくりを広げていくことと思います。北海道の未来につながる森づくりが楽しみです。



Present

アンケート&プレゼント

「モリイクvol.29」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？
右からそれぞれお選び下さい。

巻頭コラム (P2) 森あそび研究所 (P4,5)
Girls in the Forestry (P6~11)
木づかい (P12) 大きな木の小さな物語 (P13)
ほっかいどう 森のイキモノSOS (P14,15)
木育エッセイ (P16)
あすもりレポート (P17~19)

- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか？(はい・いいえ)
Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、メールにてお送り下さい。右の二次元コードより、アンケートフォームからもご回答いただけます。

応募締切 5/30(金) 当日消印有効

コープさっぽろ環境推進グループ
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
メール: csapmori@sapporo.coop

※あすもりやモリイクについてのお問合せは右の「お問合せフォーム」二次元コードからどうぞ

P R E S E N T !



アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、「創り舎」より、オニグルミの樹皮の小さなトレーか小物入れのカゴをプレゼントします。どちらが届くかはお楽しみに。

※プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます



アンケート
回答フォーム



その他
お問合せフォーム